

急速に進む、顔認証の導入

◆顔認証の導入、手続きをスムーズに

羽田空港に2017年10月、日本人の帰国手続き時の顔認証が先行導入された。パナソニックの「顔認証ゲート」が採用されており、事前登録は不要でパスポートのICチップ内の顔画像と、ゲートで撮影した顔画像とを照合する。ICチップには氏名、国籍、生年月日、旅券番号、顔画像が記録されている。これまで導入されていた自動化ゲートは、事前の指紋登録が必要で、顔画像と指紋の照合で本人確認が行われていた。指紋認証をなくし、顔認証のみで照合することになる。18年4月には成田空港にも導入される予定だ。

一方、NECの顔認証は、米国国立標準技術研究所（NIST）が実施した動画顔認証技術のベンチマークテストにおいて照合精度99.2%と高い評価を獲得している。NECは、カメラの前で立ち止まることなく歩きながら顔認証ができる「ウォークスルー顔認証システム」を東京オリンピックに向けて売り込んでいく計画だ。ほかにも、駅、競技場など、顔認証を活用した入退室管理の導入が進んでいる。

◆スマホの顔認証により、活用の場が広がってくる

Alibabaは17年9月に中国・杭州のケンタッキーフライドチキン店舗に世界で初めて顔認証決済システムを導入した。アプリ「Alipay」に登録して顔認証を有効にすれば、支払時にはスマホも不要になる。

17年発売の米Apple「iPhone X」は、自社の3D顔認証システム「Face ID」を搭載した。Appleのオンラインストア（App Storeなど）での購入やApple Payの認証に使用され、非接触認証で快適になっている。

生体認証には、顔認証、指紋、虹彩、静脈、声などがある。高い認証精度が求められる銀行ATMでは指静脈認証が採用されており、顔認証に移行するには時間がかかる。しかし、顔認証は最も簡便な認証システムであり、防犯や監視目的に設置が広がったカメラも顔認証システムの市場拡大の可能性を支えるものになる。将来、現金もカードもスマホも不要で、顔認証だけで買い物も飲食もできるようになる、そんな日常生活の実現が近づいている。

【米山久美子】